

【情報源】

布施祐仁著 『ルポ イチエフ 福島第一原発レベル7の現場』 (岩波書店 2012.09) 126～127頁

2012年2月8日、東京電力は震災後初めて、福島第2原発を福島県の調査団や報道陣に公開した。新聞を見て、私はあっと驚いた。同原発4号機の圧力容器の真下で制御棒を出し入れするペDESTALと呼ばれる場所に、調査団や報道陣が立ち入っている写真が大きく載っていたのである。しかも、誰一人としてマスクをしていない。

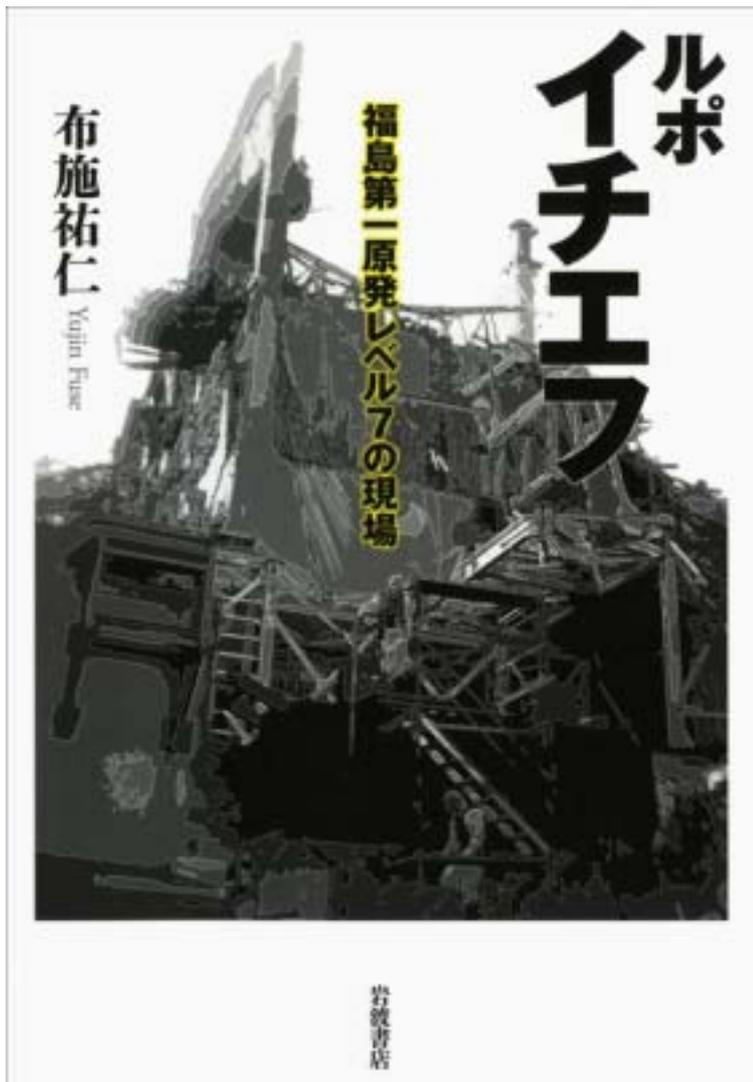
通常、公開されるのはせいぜいオペフロまでで、原子炉中枢の格納容器内にあるペDESTALまで公開されるのは極めて異例のことだ。東電としては、第2原発がそれだけ「安全」であることを、県や社会にアピールしたかったのだろう。

だがその裏で、多くの作業員が除染労働に駆り出されたことは、ほとんど知られていない。

「1号機から3号機までは、震災直後にサブちゃん(サブプレッション・プール=圧力抑制室)から水があがって来た部分だけを除染したのですが、なぜか4号機だけはドライウエル(格納容器内)の上から下まで全部除染しました。被害が少なく、一番きれいに見せられるのが4号機なので、公開するために全部除染したんだと思います。4号機は、事故防止の工事を進めながら、発電できる状態まで持っていくと聞いています」

福島県商工会議所連合会の瀬谷俊雄会長は同年3月2日付の朝日新聞で、「批判覚悟で」と前置きしながら、福島第2原発を再稼動し、その電気を安く企業に提供して復興に活かしていくことを提言している。

東京電力も、福島第2の4基と福島第1の5、6号機については、本書執筆時点で廃炉を明言していない。



目次

プロローグ	なぜ「彼ら」なのか
第1章	決死隊 5
第2章	被曝作業 43
第3章	ピンハネ 85
第4章	原発労働ヒエラルキー 119
第5章	犠牲と補償 145
エピローグ	「距離」を埋めるもの
	あとがき

布施祐仁 (ふせ ゆうじん)

1976年生まれ・ジャーナリスト

著書に『日米密約 裁かれない米兵犯罪』(岩波書店) 『災害派遣と「軍隊」の狭間で戦う自衛隊の人づくり』(かもがわ出版)など

福島第2原発、巨大津波の爪痕生々しく 内部公開 / ゆがむシャッター、高さ3メートルの壁に汚れ

東京電力は8日、東日本大震災で被災し、冷温停止状態になっている福島第2原子力発電所を震災後初めて報道機関に公開した。福島県などの立ち入り調査に伴う公開。1号機原子炉の建屋には巨大津波の爪痕が生々しく残り、室内には仮設の電源ケーブルが張り巡らされていた。



東京電力福島第2原発の4号機原子炉格納容器内で、原子炉下部の基礎台を視察する福島県などの調査団

県や同原発が立地する富岡町、楡葉町の調査団はこの日、1号機原子炉建屋で、津波で浸水した非常用発電機の復旧状況や、使用済み燃料の保管状況を確認。4号機原子炉格納容器内では主蒸気隔離弁や再循環ポンプ、原子炉下部の基礎台を視察した。

津波被害が最も大きかったのは、原子炉につながる海沿いの冷却装置がある建屋。4棟すべてが浸水。壁に地上約3メートルまで黒ずんだ汚れが残り、大量の海水が押し寄せたことがわかる。出入り口を閉ざす鉄製のシャッターはゆがんでいた。建屋が水浸しになった影響で従来の電気系統が使えないため、室内の床には仮設の電源ケーブルが張り巡らされ、天井の照明も仮設のまま。東電によると、冷却装置への電力供給は延べ約9キロに達する仮設電源ケーブルを使用しているという。非常用の電源装置が故障した1号機の原子炉建屋は、海水が浸入した空気口をベニヤ板で封鎖。この日は設備の細かい点検や耐震補強の工事中で、作業服姿の担当者が慌ただしく行き交った。

津波が既存の防波堤を乗り越えた1号機の南側には高さ約4メートルの土のうや仮設の防波堤を設置。敷地内は最大で深さ70センチにわたり地盤沈下したといい、建物と敷地の至る所に亀裂や段差ができていた。同原発の設楽親副所長は「あくまで応急処置。安全基準や設備などは必要があれば見直していく」と説明した。東電によると、第2原発の4基は昨年3月11日の東日本大震災発生時、いずれも稼働中。海面からの高さ5.2メートルの想定を上回る6.5~14メートルの波が到達し、1、2、4号機の原子炉の冷却用に海水を送るポンプが一時停止した。3基の原子炉は同15日朝までに温度が100度以下になる冷温停止状態になった。東電が1月31日に提出した復旧計画では、冷温停止の維持を確実にする2012年度までに非常用ディーゼル発電の改修や設備の防水化などの安全対策を実施する予定。